CLOSE-UP INTERVIEW

小説家 澤田瞳子さんに聞く

［聞き手］脇浜紀子さん 京都産業大学現代社会学部教授

豊かな想像力であったかもしれない歴史を描き出す

さわだ・とうこ
1977年生まれ、京都府出身。同志社大学文学部卒業後、同大学大学院博士前期課程修了。2010年に長編作品『孤鷹の天』でデビューし、同作で中山義秀文学賞を受賞。2015年刊の『若冲』、2017年刊の『火定』など4作品が直木賞候補に選ばれた後、2021年に『星落ちて、なお』で、第165回直木三十五賞を受賞。

歴史ある京都の街で本を読みふけった子ども時代

脇浜　京都にある同志社大学の今出川校地に来ています。クラーク記念館をはじめとした古い建物が並ぶ、とても美しいキャンパスです。本日、お話を伺うのは学生時代にこのキャンパスで過ごされた、小説家の澤田瞳子さんです。こんな素敵なキャンパスだったらさぞかし充実した学生生活を送られたのではないでしょうか。

澤田　同志社大学は、京田辺校地と今出川校地の大きく2カ所に分かれており、それぞれに2年間通いました。京田辺校地は緑が豊かで、空き時間に芝生に寝転がって本を読んだりしていた思い出があります。ここ今出川校地に来てからは、図書館にこもって勉強していることが多かったですね。

脇浜　京都生まれ、京都育ちとのことですが、ご自身の中で京都という場所がアイデンティティの一部になっていたりするのでしょうか。

澤田　私は本当に京都しか知らないので、正直、そういう実感はありません。ただ、日本の歴史や文化との距離の近さといったものを、日々楽しみ続けているのは事実です。

脇浜　文化や歴史が感じられる空気に包まれながら、お母さまである作家の澤田ふじ子さんが執筆される姿を目にしていたかと思いますが、その影響も受けていらっしゃいますか。

澤田　子どもでしたから、母はそういう仕事をしている人なんだなくらいにしか思っていませんでした。ただ、幼い頃から本だけは家にたくさんあり、自由にいろいろな本を手に取ることができる環境でしたね。

脇浜　子どもの頃はどんな本を読んでいたのですか。

澤田　最初は普通に絵本や児童書が大好きでした。印象深いのは、野村胡堂の『銭形平次捕物控』です。テレビで銭形平次の時代劇を見ていたのですが、それに原作となった小説があることを知り、小学5年生の時に親に頼んで買ってもらったんです。

脇浜　小学校5年生で野村胡堂とは、渋いですね。

澤田　当時、『次郎物語』という小説が映画化されたのですが、その作者の下村湖人と野村胡堂の区別がつかなかったんです。それくらいの気軽な感覚で読んでいたのですが、現代ではなく過去のことを描いた物語があることを知るきっかけになりました。

奈良時代の研究と能楽で歴史に触れる

脇浜　澤田さんは同志社女子中学校・高等学校に通われ、同志社大学に進学されましたが、同志社スピリットのようなものを感じることはありますか。

澤田　同志社大学の前身である同志社英学校の創立者・新島襄が好んだ「倜儻不羈（てきとうふき）」という言葉があります。〝才気がすぐれ、独立心が旺盛で、常軌では律しがたいこと〟を意味しますが、その精神が同志社にはしっかり受け継がれていると感じます。それぞれが自分の範疇（はんちゅう）で自分の好きなことに挑戦する。自主性を重んじて、枠にはめない。そういうところが同志社スピリットではないかと思います。

また、仕事で各地に行きますと、同志社出身の方とお会いする機会がありますが、初めてお会いしても通じ合うものを感じますね。

脇浜　確かに同志社大学は、澤田さんのような小説家を輩出したり、その一方でラグビーが強かったり、とても多様性がありますね。そんな大学へ進学することをどのように考えて決められたのでしょうか。

澤田　当初は神学部への進学を希望していました。宗教という全く知識のないことを学んでみたいと思ったのです。最終的にはもう少し幅を広げて、歴史や文化を学ぶ文学部文化学科文化史学専攻に進みました。

脇浜　主にどのようなことを学ばれたのでしょうか。

澤田　日本の歴史、その中でも奈良時代の文書について研究をしていました。

脇浜　なぜそこに興味を持ったのですか。

澤田　古代から近代まで歴史上の出来事に幅広く興味を持っていたのですが、近代と異なり、奈良時代のような古代になると残っている史料が少ないのです。読むべき文献が少ないからと決めたのですが、史料が少ないからこそかえって難しいのだと後で分かりました。

脇浜　大学では学業にいそしむ一方で、能楽部に所属されていたと伺っています。どのような活動をされていたのでしょうか。

澤田　高校生の時に能楽を観たのですが、正直なところ全く理解できませんでした。だから、自分

澤田 瞳子さん

が実際にやってみたら何か分かるんじゃないかと思って入部してみたんです。3年生までは紋付袴を着て、舞や謡の一部を練習したり。「面（おもて）」や衣装を着けて舞えるのは4年生だけでした。入部してみるとかなりの体育会系で、想像以上に大変でした。当時は、舞台前はほぼ毎日稽古で、9泊10日の合宿は、朝7時半の朝食から始まり、稽古が終わるのは深夜。4年生で引退するまで活動を続けましたが、能楽を面白いと感じられるようになりました。人間関係も濃密で、先輩・後輩とは今でもお付き合いが続いていますし、今も鼓や笛を習っています。

史料を基に想像力を膨らませる

脇浜　奈良時代を研究したり能楽に励んだりした後、大学院へと進学されました。修了後にどのような経緯を経て小説家になったのでしょうか。

澤田　大学院を出た2003年はまだ就職超氷河期で、就職先を見つけるのに苦労しました。博物館の学芸員になりたいと考えていたのですが、求人もわずかで難しい状況でした。歴史に関わる仕事をしたいという思いはずっと抱いていたので、方法を模索した結果、歴史エッセイを書くようになりました。歴史上の意外な小ネタなどについて書いていたのですが、歴史の面白さをより多くの方に知ってほしい、今度は小説を書いてみようと思うようになりました。小説を読むのが大好きで、歴史も大好き。だったら、歴史小説を書けば両方のいいとこ取りができるんじゃないかという発想で始めました。

脇浜　デビュー作は、8世紀、天平宝字（てんぴょうほうじ）年間の少年たちの生きざまを描いた『孤鷹の天』。2021年に直木賞を受賞された『星落ちて、なお』では、幕末から明治にかけて活躍した天才絵師・河鍋暁斎（かわなべぎょうさい）の娘、とよの人生を描いています。古代から近代まで幅広い時代を小説の舞台にしていますが、時代によって書く時の難しさに違いがありますか。

澤田　新しい時代の方が史料が多いので、調べるのに時間がかかりますし、得た材料を折り畳んで風呂敷のようにまとめる力が必要になります。一方、古代になるとまとめるべき史料が無さ過ぎて、空想を広げて新しいネタをどんどん自分で作っていかなければなりません。どちらも苦労はあり

脇浜 紀子さん

ますが、苦労の方向性が違いますね。私はできるだけ、事実があればそれを全て使いたいと思っていますので、おのずと全体のまとめ上げ方も変わってくるんです。

脇浜　『星落ちて、なお』を拝読して驚いたのは、ろうそくの灯が消えかかっている様子や、絵師が使う画材などについての緻密な描写です。実際に見たことがないと書けないような表現に感銘を受けました。それも頭の中で空想を広げて、表現の仕方を考えるのでしょうか。

澤田　例えば、その時代に道路は舗装されてないから、雨が降ったらぬかるみになる、そうすると歩きにくくなるから、人々は着物を尻端折（しりはしょり）りするだろう。そういう風に、一つの光景を書く時に想像を広げていきます。『若冲』という作品を書いた時には、日本画の先生のところへ取材に行き、日本画で使う道具や描き方について教わりました。そうした取材をすると想像を膨らましやすいというのはありますね。

脇浜　その時代をほうふつさせるような古い言葉を多用していますが、意識的に使われているのでしょうか。

澤田　そうですね。当時使っていた言葉をなるべくセリフの中に取り入れることでその時代の雰囲気が出せると思っています。話し言葉や描写だけでなく、地の文からも時代の空気感を醸し出したいのです。

脇浜　『星落ちて、なお』を読み進めていると、関東大震災のシーンが出てきて驚きました。あれは史実に基づいているのでしょうか。

澤田　実際に主人公であるとよが、ああいった震災に巻き込まれたかどうかは分かりません。ただ、時代的には何らかの経験はしていただろうと思います。

大学時代に身に付けたリサーチ力

脇浜　震災の描写もとてもリアルでした。何かリサーチなどはされたのでしょうか。

澤田　関東大震災は史料が多く残されているんです。竹久夢二も日記やスケッチを残していますし、吉村昭さんも『関東大震災』という作品を書いています。そうした過去の作品から学んだことは多いですね。

脇浜　そうしたリサーチをする時に、大学時代の学びが役立っていると感じることはありますか。

澤田　歴史の研究をするに当たってさまざまな史料を調べましたが、その時、目的とする情報にたどり着くにはどうすればいいのか、また調べることで何が分かるのかをいつ

も考えていました。そのおかげで、小説を書く際にも効率的にリサーチができています。例えば、富士山の噴火のシーンが出てくる小説を書く時に、歴史的な史料だけでなく、火山に関する学術書なども当たって、分かる箇所や必要な箇所だけを読んだりする。そうした資料の探し方ができるようになったのは学生時代です。

小説を例にとりましたが、いま世の中には情報があふれている中で、事実に基づいた情報を見極める力がとても大切になっていると思います。そういったこととともつながっている気がしますね。

脇浜　小説にはいろいろなジャンルがありますが、歴史小説ならではの面白さはどこにあると思いますか。

澤田　私は歴史小説を人に薦める時に、歴史はかつて生きた人間たちのことを描いているという風に伝えています。歴史小説を通して、過去にこんな人が生きていたのかもしれない、こんな人間模様が繰り広げられていたのかもしれない、と提示することで、分かりにくいと敬遠していた人にも歴史に親しみを持ってほしいのです。

脇浜　書き手として楽しさを感じる部分はありますか。

澤田　最近忙しくて楽しいという感覚も忘れていましたが、やはり書いている時は楽しいですね。史料に出てくるよく知られていない人物について調べているうちに、どこにも書かれてはいないけれど、この人はこの時にこういうことを考えていたのではないかと、想像が膨らんでくることがあります。歴史学では、歴史に大きな影響を及ぼさなかった人々が研究されることは稀です。しかし、自分が想像を膨らませることで、歴史に埋もれていた人々が血肉を持った存在として感じられると、とてもわくわくしてきます。

脇浜　歴史上の人物に対してそんな風に考えたことがないのでとても新鮮です。澤田さんがわくわくしながら書いた小説の中でも、特に印象に残っている作品はありますか。

澤田　やはりデビュー作の『孤鷹の天』ですね。あったかもしれない歴史を掘り起こすことに、とてもわくわくしながら書いたのを覚えています。プロの小説家になるとは思っていなかったので、自分の持っている材料をふんだんに使って書きました。

普通の日常を生きるため アルバイトを続ける

脇浜　現在は作家活動を続ける一方で、同志社大学でアルバイト職員としても働いておられると伺いました。どの

ようなお仕事をされているのでしょうか。

澤田　所属していた研究室の先生が不安定な生活をしている私を心配してくださったことで、アルバイト職員という形で採用していただいたんです。それから15年以上、週1回、アルバイトに来て学生に書類を渡したり、コピーを取ったりしています。

脇浜　作家活動をしながらアルバイト職員を続ける理由はどこにあるのでしょう。

澤田　まずは、図書館が利用できます。小説家は所属先を持たないので、調べものに大変苦労します。そんな中で大学図書館を利用させていただけるのは、とてもありがたいです。次に、私が人との会話に飢えていることがあります。私は家族と猫と暮らしていますが、家にずっとこもって執筆していると、若い世代の人たちと触れ合う機会がありません。やはり外から新しい情報が入ってこないと、頭の中がどんどん曇っていきそうで。私にとって、知らない人と知らないお話ができる貴重な機会でもあるんです。

脇浜　若い世代の人たちは言葉遣いが面白く、エネルギーにあふれているので刺激を受けますよね。その刺激が小説家としての仕事にプラスに働いたりしていますか。

澤田　そもそも小説家がアルバイトをしているのではなく、アルバイト職員が直木賞を取ったと言った方が正確です。小説家になって賞を取ると、周囲の方がとても大事にしてくださいますが、例えば、農家である私が作ったカボチャがとても高い評価を受けたとしても、評価されたのはカボチャであって私の人間性ではありません。それと同じように、私の小説は評価していただけても、私自身はごくごく平凡な人間だと思っていますから、なるべく普通の日常を生きたいと思っています。

脇浜　先生と呼ばれるより、普通の日常にいたいのですね。

澤田　デビュー作の『孤鷹の天』が中山義秀文学賞という賞の選考対象に選ばれましたが、公開選考に当たって自分の写真を提出しなければならなくなりました。実はこの時、ピンクのウサギの着ぐるみを着た〝着ぐるみ作家〟として活動しようと思っていました。ただその時、他に選ばれていた候補者が大先輩ばかりで、そこに着ぐるみ姿で並ぶ勇気がありませんでした。仕方なく撮ってもらった写真を提出したところ、受賞してしまったという経緯があります。

脇浜　澤田さん個人とは切り離して、作品自体を楽しんでほしいということでしょうか。

澤田　なるべく普通の生き方をしたいということもありますが、小説家という枠にはまらず、新しいこと、興味のあること、知りたいことをどんどんやっていきたいというのも理由の一つです。

小説の舞台を海外にも広げたい

脇浜　先ほど猫のお話が出ましたが、そらちゃんという猫と暮らしているんですね。

澤田　もう10年一緒にいます。見ていると面白いですね。私の自由にならない、好き勝手に生きている生き物が、目の前にいるという感覚が刺激になります。小説では過去の人間を描きますが、違う時代に生きた人間も私が手を出せる存在ではありません。猫を見ているとそんなことを考えてしまうので、作品にも影響しているかもしれません。

脇浜　私も猫を飼っているので分かる気がします。小説を書く上でもう一つ影響を与えている生き物が海洋生物だそうですね。なぜ興味を惹かれるのですか。

澤田　大学院を出た後、海洋系の大学に入り直そうと考えたり、水族館で働きたいと思っていたくらい海洋生物が好きなんです。特にイルカやアシカなど海獣系の生き物が大好きです。あとは知らないことを知りたいからですね。やはり私にとって未知の動物だから惹かれるのだと思います。

脇浜　大好きな生き物である猫や海洋生物をテーマに小説を書くことは今後ありそうですか。

澤田　来年発表する予定の短編で、おそらく猫を題材にすると思います。捕鯨はすでに複数の歴史小説の題材になっているので、少し新しいことを考えたいですね。

脇浜　他に構想されているテーマは何かありますか。

澤田　日本と外国の関わりについてはずっと興味があります。外から見た日本を知ることで、自分たちのいるところもはっきり見えてくるように思います。今後は日本だけにこだわらず、世界の歴史を舞台に作品を書くかもしれません。

脇浜　今後の作品も楽しみにしています。本日はありがとうございました。